

特別展「毒」大阪市立自然史博物館と長居植物園

参加者	梶木、菊池、高城、長谷川、小林
行程	10:20~12:00 「毒」展観察 大阪市立自然史博物館ネイチャーホール 12:00~12:50 公園内店で食事 13:00~13:20 MAKINO展 花と緑と自然の情報センターひふみホール 13:30~13:40 長居植物園「約50年のあゆみと未来」展示 13:40~15:00 植物園を右回りで、ネモフィラ・フジーバラ園—ボタン園— シャクナゲ園—里山ひろば—池の西側



「毒」展

毒展は次の5章で構成されています。

第1章 毒の世界へようこそ

毒は大雑把に言えば、他人を含む生物に害を与える物質だ。スイスの医学者パラケルススは「あらゆる物質は毒である。毒であるか薬になるかは、用量によるのだ」という言葉を残した。この言葉の通り、毒性を示す物質は、必ずしも毒になるとは限らない。1つの物質はしばしば複数の生理作用をもっているのだ。

たとえ人体の有用なものでも、取りすぎると毒になることがある。またアレルギー反応のように感受性の違いによって一部の人に



とっては毒になることもある。生物に何らかの影響もたらす物質のうち、ヒトにマイナスにはたらくのもを毒、逆にプラスにはたらくものを薬、とよんで、多様で複雑な自然界を理解し、利用するために人間が作り出した概念と考えることもできる。

第2章 毒の博物館

この章は生物、植物、動物、菌類、鉱物、火山ガス、人間が作った毒について解説、展示しています。

生物が毒をもつ主な理由は「身を守るため」と「攻めるため」である。植物はシュウ酸を溜め、食べられないように身を守っている。毒針で敵の攻撃から身を守る動物もいる

一方、ヘビやサソリなどは獲物をえるために毒を積極的に利用している。



第3章 毒と進化

この章では、毒が生物の進化の引き金になった例を紹介しています。例えば、現在でこそ多くの生物に必要な酸素には、実は毒性があり、これに適応した生物が進化した。私たち自身も、酸素に耐えるばかりでなく、それを上手に使う進化を遂げた存在である。生物のまわりにある毒に関する環境の変化は、生物の植生の変化や擬態や相互関係の変化をもたらしている。また、毒の有無を趣旨などの散布にうまく利用した例や、毒に耐えるように進化した例もある



第4章 毒と人間

この章は考古学的な証拠から。人間が毒を最初に利用したのは狩りだったと考えられる。さらに、植物の毒を大量に与えて漁獲を行うことも古くから行われている伝統的な方法だ。やがて、人間は毒と向き合い、その正体や本質に迫りながら、毒を利用する方法を編み出していく。



終章 毒とはうまくつきあおう

毒を「ヒトを含む生物に害を与える物質」として私たちの身の回りの環境や生活に、生物など毒の世界をめぐってきた。生物にとってはその暮らしを支える物質と同時に、進化のきっかけを与える重要なものであることが示された。私たちがどのように毒と付き合いしていくべきか、考えたい。

長居植物園

昼食も少し寒かったが天気も良くテントの下でみんな揃って食べ、雑談を交わした。

植物園はネモフィラが出迎えてくれました。下見に来たときはまだまだと思っていたが満開の状態、そばの藤棚も見事な花が咲き誇っていました。



長居の植物園は2年後に50周年を迎えるということで、昨年11月から5カ月間休園を植物の生育環境変え、生き生きと生育するようにと大幅な工事をおこなったとのこと。

都会の公園で「里山ひろば」という地域の名称を付けたり、里山の講演会を催したりと、ちょっと違った展示を計画されているようです。長居植物園のホームページでも今後の報告に含みを持たした記載をされています。楽しみにしたいと思います。

長居植物園の MAKINO 博

NHKの朝ドラで、牧野博士のふるさと・高知県が放映されており、各地で牧野博士の功績をたたえて、記念展が開かれています。高知県の牧野植物園に行ったこと



が在りますが、広大な広さで数多くの植物が生育されていました。

